幼年教育研究年報，第26巻
The Annual Research on Early Childhood, 2004, **26**,

研究論文

幼児期における「将来の夢」と空想／現実の区別認識

富田昌平[1]

Preschoolers' future dreams and fantasy-reality distinction

Shohei Tomita[1]

In this study, we probed preschooler's future dreams and their fantasy-reality distinction. Participants were 68 four- to six-year-old children. We first asked children to talk their future dreams and the reasons. We then asked children several questions about method that the dream is realized and about possibility that the imaginary dream is realized. The results indicated that a boundary between fantasy and reality increasingly sophisticated as age increased, and also indicated that a method that the dream is realized increasingly sophisticated.

Key Words: future dreams, fantasy-reality distinction, possibe and impossible, preschoolers.

幼稚園や保育所のお誕生日会や発表会で，子どもに「大人になったら何になりたい？」と尋ねてみる。すると，仮面ライダー，ウルトラマン，セーラームーンなど実現不可能な夢がしばしば子どもの口から語られる。「将来の夢」について話すことは，子どもからすれば自分自身の考えを発表する良い機会であり，夢や憧れを再確認しつつ，それに対する興味・関心をさらに高めることのできる場であるといえる。また親や保育者にとっては，年齢ごとの子どもの成長・発達をみる思いがして微笑ましくもあり，また子どもに対してさらに愛情を注ぎたくなるような，そんな動機の高まる場面であろう。

子どもの「将来の夢」については，第一生命が毎年公募し，その内容が新聞やニュースなどで公表されるのをはじめ，玩具メーカーのバンダイも定期的に調査を行うなど，その夢の内容自体は広く知られるところである（第一生命保険相互会社，1994; 大井，1994; 渡部，2002）。だが，それらの調査は子どもの認識世界を探ることを目的としてよりもむしろ，時代の変化や時代ごとの子どもの興味・関心の内実を探ることを目的として行われている。正確には把握できないが，学術的なものに限らず広く雑誌を見わたすと，こうした社会学的調査は数多く存在している。

その一方で，子どもの成長・発達を探るといった発達心理学的な研究動機から「将来の夢」を探った研究は数少ない。そうした中で，子どもの「将来の夢」を親ではなく子ども自身に尋ね，半構造化インタビューによってその詳細を明らかにしようと試みた森（1994a, b）の研究は重要である。森（1994a, b）の研究1では，4，5，6歳児123名に対して「大人になったら何になりたい？」，「本当になれると思う？」，「どうしてなれないと思うの？」などの質問を行った。その結果，テレビキャラクターや動植物など不可能な夢を挙げる子どもが4，5歳児に多く（60%，33%），6歳児ではほとんど見られないこと（10%），また，空想的な夢を挙げた子どものほとんどが「本当になれる」と考えていることを明らかにしている。

しかし，空想的な夢を挙げなかったからといって，彼らがその夢の実現可能性をまるで信じていないかといえば，そうではない。彼らはただ自らの「将来の夢」として空想的な夢ではなく現実的な夢を選んだだけで，その実現可能性を信じているかもしれない。そうした潜在的な子どもを明らかにするために，森（1994a, b）は研究2を行っている。彼女は4，5，6歳児77名に対して，「もしも他の子が『大人になったらX（対象物）になりたいな』と思ったら，それになれると思う？」，「どうしてなれないと思うの？」などの質問を行った。対象物は動物（犬，猫），テレビキャラクター（ダイレンジャー，セーラームーン），職業（警察官，ケーキ屋さん）である。そ

[1] 山口芸術短期大学保育学科

の結果，動物の場合，「なれる」回答は4歳児45%，5歳児50%，6歳児23%であり，4歳児では「なれない」と回答した場合でも，「女の子だから」「ブタさんだったら」というように種の永続性の理解にもとづくものではなかった。テレビキャラクターの場合，「なれる」回答は4歳児79%，5歳児71%，6歳児45%であり，「なれない」と回答した場合でも，その多くは「変身できないから」「道具がないから」という理由で，「人間だから」という理由は6歳児にわずかに見られただけであった。

空想的な夢を不可能な夢として理解することはまず空想と現実とを切り離して区別し，次に空想を虚構性や非合理性の観点から理解することによって可能となるであろう。先行研究によると，子どもは早くて生後12ヶ月から自発的にふり遊びをし始め，3，4歳までにさまざまな想像上の人物や生き物を盛り込んだファンタジーを作って遊ぶようになる（Singer & Singer, 1990）。親をはじめとする周囲の大人たちもまた，幼い子どもと実在しないものについての話をし，彼らが行うふり遊びを積極的に奨励する（Kavanaugh, Whittington, & Cerbone, 1983）。このように，子どもは発達の初期から空想的な素材とよく親しみ，親をはじめとする信頼できる大人たちの庇護のもと，それらを現実のものとして受容する。生後3，4年間のこのファンタジーとのかかわりを通して，子どもはシンボルの使用をマスターし，社会的な知識や技能を高め，感情のコントロールを学ぶのである（DiLalla & Watson, 1988）。

親によっては，わが子がファンタジーに充足し過ぎることによって徐々に現実との接点を見失い，ついには適応的な問題解決を避けるようになるのではないかと心配したり，真実でない情報を子どもが信じ込みすぎることによって，非科学的な誤った認識を持つようになるのではないかと不安を抱く者もいる（Bettelheim, 1976; Fraiberg, 1959）。しかし，いくつかの研究は，その後数年の間に子どもたちは空想と現実との境界について学び，その内容をうまくコントロールしながら，両者の間を自由に行き来できるようになることを示している。例えば，子どもは4歳から6歳にかけて，ふり遊びにおいて「ホント」と「ウソッコ」を区別し，その内容をコントロールできるようになり（DiLalla & Watson, 1988; 加用，1981, 1992），絵本の中の出来事を現実に起こり得ることと現実に起こり得ないこととに区別することができるようになる（Morison & Gardner, 1978; Samuels & Taylor, 1994; Taylor & Howell, 1973）。また，6歳から8歳にかけて徐々に，サンタクロースや怪物やテレビ・キャラクターなどを現実には存在しない「ファンタジーの世界の住人」として区別するようになる（Prentice, Manosevitz, & Hubbs, 1978; 杉村・原野・吉本・北川，1994; 富田，2002）。

しかし，以上のように空想と現実とを区別し，両者の境界を強固なものにしていく一方で，子どもはもうひとつの可能性も完全に捨て去ってしまっているわけではない。つまり，ある条件下では，または条件さえ整えば，空想と現実との境界は弱まり，空想したこと，不可能なことが現実のものになるといった，神秘的で魔法的な力の関与による実現の可能性を信じているようなのである。これらは“魔法的信念”（magical belief）や“魔法的思考”（magical thinking）という用語のもと，近年盛んに研究が行われている。例えば，幼児は空想が現実になることはないと認識しながらも，実験者が用意した事物とともに部屋に一人で残されると，もしかしたら現実になるのではないかと考え始め，その可能性を信じているかのような行動や主張を示すこと（Harris, Brown, Marriott, Whittall, & Harmer, 1991; Johnson & Harris, 1994; Subbotsky, 1993, 1994; 富田・小坂・古賀・清水，2003）や，幼児の多くは魔法使いや魔法の力の存在を信じ，願いごとの効力を信じていること（Phelps, & Woolley, 1994; Rosengren, & Hickling, 1994; Rosengren, Kalish, Hickling, & Gelman, 1994; Woolley, Phelps, Davis, & Mandell, 1999）などが明らかにされている。

森（1994a, b）の研究では，(1) 幼児期の「将来の夢」において空想的な夢は加齢に伴い減少し，現実的な夢が増加すること，(2) 空想的な夢と現実的な夢との区別において種の永続性という観点の使用は6歳までに可能になるものの，虚構性という観点の使用は6歳でも難しいこと，の2点が示された。しかし，先行研究を概観して分かるように，幼児期における空想／現実の区別認識の発達過程は，空想と現実とを区別し，その境界を強固なものにしていく過程であると同時に，空想と現実との境界を飛び越えることを可能にする条件についての認識を洗練させていく過程でもある。つまり，幼児期では現実的認識の洗練化と同時に，空想的（魔法的）認識の洗練化も進行しており，いずれも彼らの成長・発達において欠かせない重要なことであると考えられる。

そこで本研究では，森（1994a, b）が作成した半構造化インタビューにいくつか新たに質問を加えて，幼児はどのような条件が整えば，またどのような条件を満たす者ならば，実現不可能と思われる夢も実現可能になると考えているのか，すなわち，夢を実現させるための条件についての彼らの考えを探ることを目的とする。それによって，幼児の「将来の夢」

と彼らの空想／現実の区別認識との関係を検討する。

方法

被験児

防府市内と小郡町内の私立幼稚園に在籍する4歳児23名，5歳児24名，6歳児29名。このうち4歳児3名と6歳児5名は，将来の夢を答えることができなかったため分析から除外した。従って，最終的に4歳児20名（男児7名，女児13名；4歳2ヶ月），5歳児24名（男児15名，女児9名：5歳1ヶ月），6歳児24名（男児10名，女児14名；6歳2ヶ月），計68名を分析の対象とした。

手続き

幼稚園の一室を借りて個別の面接調査を行った。質問は以下の順で行った。

質問1:「大人になったら何になりたいと思っているかな？」

質問2:「どうしてそれになりたいと思うの？」

質問3:「どうやったらなれると思う？」

質問4:「それは他の人でもなれると思うかな？なれるとしたらどんな人がなれる？」

質問5:「他になりたいものはあるかな？」

質問6:「大人になったら魔女になりたいって言っている子がいるんだけど，なれると思う？　どうやったらなれると思う？(どうしてなれないと思うの？)」(質問6は，質問1で「不可能な夢」をあげず「可能な夢」をあげた者に対してのみ行った)

結果と考察

空想的な夢と現実的な夢との境界

質問1:「大人になったら何になりたいと思っているかな？」）の回答結果は，現実になり得る「現実的な夢」と現実になり得ない「空想的な夢」とに分類した。現実的な夢には「お花屋さん」,「野球選手」,「幼稚園の先生」などの職業や,「お母さん」などの大人になってからの名称,「モーニング娘。」など芸能人などが含まれ，空想的な夢には「ウルトラマン」,「仮面ライダー」,「セーラームーン」などのテレビキャラクター,「イヌ」,「バナナ」などの動植物，その他に「空をすべる人」,「お菓子を集めて食べる人」など非現実的な職種が含まれた。中でも動植物と非現実的な職種は4歳児においてのみ見られた。

Table 1は各回答の出現度数を年齢別，および男女別に示したものである。年齢差を調べるために2(夢の性質）×3（年齢）のχ^2検定を行ったところ，有意差が示された（$\chi^2(2) = 9.30, p<.01$)。残差分析の結果，4歳児・5歳児は6歳児よりも空想的な夢をあげることが多いことが分かった。また男女差についても2（夢の性質）×2（性別）のχ^2検定を行ったところ，有意差が示された（$\chi^2(1) = 5.90, p<.05$)。残差分析の結果，男児は女児よりも空想的な夢をあげることが多いことが分かった。

次に，質問5:「他になりたいものはあるかな？」の回答結果を分析する。この質問は第一の夢と第二の夢との間に共通点が見られるかどうかを探るために行った。Table 2は各回答の出現度数を質問1で語られた夢の性質別に示したものである。第一の夢と第二の夢との間の共通性について調べるために，2（第一の夢）×3（第二の夢）のχ^2検定を行ったところ，有意差が示された（$\chi^2(2) = 17.33, p<.01$)。また，最初に現実的な夢をあげながら第二の夢では空想的な夢をあげた者が1名見られたが，この1名も「なれないけど，もしなれるんだったら魔女になりたい」というように，不可能であることを理解した上での回答であった。以上から，第二以下の候補を尋ねたとしても「将来の夢」のカテゴリーに変化はないことが示唆された。

質問6:「大人になったら魔女になりたいって言っている子がいるんだけど，なれると思う？」の回答

Table 1　質問1「大人になったら何になりたい？」の回答結果

	年齢			性別	
	4歳児	5歳児	6歳児	男児	女児
人数	20	24	24	32	36
空想的な夢	13	15	6	21	13
現実的な夢	7	9	18	11	23

Table 2　質問5「他になりたいものは？」の回答結果

		第一の夢	
		空想的	現実的
	人数	34	34
第二の夢	空想的な夢	12	1
	現実的な夢	3	15
	なし	19	18

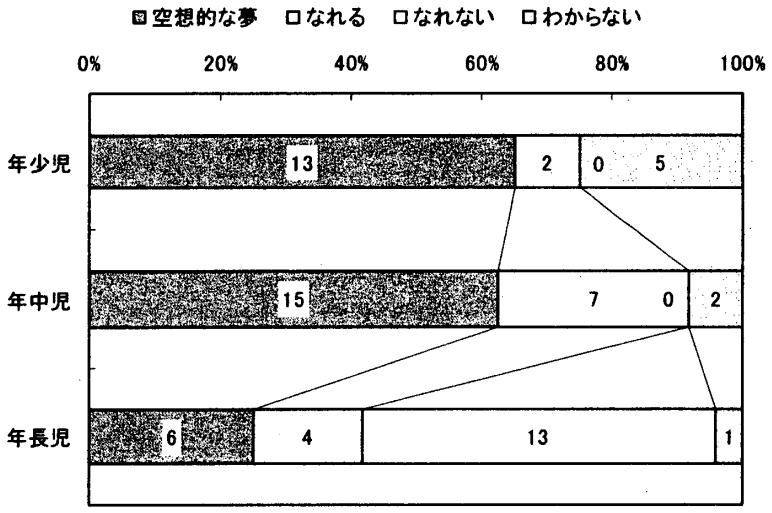

Figure 1　質問6「大人になったら魔女になりたいって言っている子がいるんだけど，なれると思う？」の回答結果

Table 3　質問2「どうしてそれになりたいと思うの？」の回答結果

	年齢			性別		夢の性質	
	4歳児	5歳児	6歳児	男児	女児	空想的	現実的
人数	20	24	24	32	36	34	34
外見・性格	4	6	5	12	3	13	2
知識・技能	2	2	9	5	8	3	10
その他	9	6	4	7	12	9	10
わからない	5	10	6	8	13	9	12

結果は，「なれる」，「なれない」「わからない」の3つに分類できた。この質問は，将来の夢として「現実的な夢」を挙げた幼児における，空想的な夢についての考えを調べるために行った。Figure 1は各回答の出現度数を年齢別に示したものである。質問1での「空想的な夢」出現度数も併記した。結果では，「なれない」回答は4歳児・5歳児では0名であったのに対して，6歳児では13名と多く見られた。このことから，4歳児・5歳児は「現実的な夢」を挙げた場合でも「空想的な夢」をなり得ると考えているのに対して，6歳児はなり得ないと考えているというように，年齢による違いが示唆された。

「どうやったらなれるか」については，「なれる」と答えた13名のうち7名が回答し，「魔法使いの練習をすれば」，「呪文を唱えたら」，「空を飛んだら」，「猫になったら」，「テレビで見たから」などと回答した。残りの6名は無回答であった。「どうしてなれないか」については，「なれない」と答えた6歳児13名中7名が回答し，「空を飛べないから」，「魔法が使えないから」，「小さい頃からなっていなかったから」，「小さいから，練習しても空から落っこちちゃうと思う」，「テレビだったらなれるけど，テレビじゃないから」，「人間が空を飛べるわけがないから」などと回答した。残りの6名は無回答であった。このことから，6歳児も必ずしも「実在しないから」という理由で「なれない」と信じているわけではないことが示唆された。

夢の理由

幼児はどのような理由から将来の夢を思い描き，それになりたがっているのであろうか。質問2：「どうしてそれになりたいと思うの？」の回答結果は，次の5つに分類できた。(1) 外見・性格：「カッコイイから」，「強いから」，「優しいから」など対象の外見や典型的な性格を指摘した場合。(2) 知識・技能：「悪い奴をやっつけられるから」，「パンがいっぱい作れるから」(パン屋さん)，「小さい子の面倒とかみられるから」（幼稚園の先生）など対象が持つ知識や技能を指摘した場合。(3) その他：「好きだから」，「なりたいから」など，その他の回答。(5) 無回答：「わからない」などの回答を含む。

Table 3は各回答の出現度数を年齢別，男女別，夢の性質別に示したものである。年齢差に関してχ^2検定を行ったところ，有意傾向が示された（$\chi^2(6) = 11.36$, $.05<p<.10$）。残差分析の結果，6歳児は4歳児・5歳児よりも「知識・技能」を理由にあげることが多いことが分かった。男女差に関してχ^2検定

Table 4　質問3「どうやったらそれになれると思う？」の回答結果

	年　齢			夢の性質	
	4歳児	5歳児	6歳児	空想的	現実的
人数	20	24	24	34	34
成長	5	6	2	6	7
行為	6	3	4	11	2
努力	2	0	5	2	5
無回答	7	15	13	15	20

Table 5　質問4「他の人でもなれると思う？」の回答結果

	年　齢			夢の性質	
	4歳児	5歳児	6歳児	空想的	現実的
人数	20	24	24	34	34
なれる―条件なし	13	4	8	10	15
なれる―条件あり／親密	3	10	3	12	4
なれる―条件あり／非親密	0	0	8	0	8
なれない	2	5	3	8	2
無回答	2	5	2	4	5

を行ったところ，有意差が示された（$\chi^2(3) = 8.39$, $p<.05$）。残差分析の結果，男児では「外見・性格」，女児では「知識・技能」が理由にあげられることが多いことが分かった。また，夢の性質の差に関してχ^2検定を行ったところ，有意差が示され（$\chi^2(4) = 14.88$, $p<.01$），空想的な夢では「外見・性格」，現実的な夢では「知識・技能」が理由にあげられることが多いことが分かった。

夢実現の条件

質問3:「どうやったらなれると思う？」の回答結果は次の4つに分類した。(1) 成長:「大きくなったら」,「ご飯をいっぱい食べたら」など成長を挙げた場合。(2) 行為:「魔法を使ったら」,「変身ポーズをしたら」,「ガオ・アクセスすれば」など特定の行為を挙げた場合。(3) 努力:「練習すれば」,「いっぱい勉強すれば」など継続的な努力を挙げた場合。(4) 無回答:「わからない」などの回答を含む。

Table 4は各回答の出現度数を年齢別，夢の性質別に示したものである。年齢差に関しては，「成長」を挙げた者が4，5歳児では5，6名見られたのに対して，6歳児では2名と少なかった。逆に，「努力」を挙げた者は4，5歳児では2，0名であったのに対して，6歳児では5名と多く見られた。また，夢の性質による違いに関しては，2（夢の性質）×4（回答カテゴリー）のχ^2検定を行ったところ，「行為」を挙げた者は現実的な夢よりも空想的な夢において有意に多いことが分かった（$\chi^2(3) = 8.30$, $p<.05$）。以上から，夢の実現に必要な条件として，幼児においては主に「成長」,「行為」,「努力」の3つが考えられているが，このうち「成長」は年少の幼児に多く，「努力」は年長の幼児に多く見られることが示唆された。また，「行為」は空想的な夢の実現に深く関わると考えられていることが示唆された。

質問4:「それは他の人でもなれると思うかな？なれるとしたらどんな人がなれる？」の回答結果は次の5つに分類した。(1) なれる―条件なし:「なれる」と回答した後，「誰でもなれる」と言うか，もしくは特にどんな人がなれるかを挙げなかった場合。(2) なれる―条件あり／親密:「なれる」と回答した後，「男（女）だったら」,「○○君（ちゃん）だったら」など同性や身近な友達など親密な相手を挙げた場合。(3) なれる―条件あり／非親密:「なれる」と回答した後，「勉強する人なら」,「優しい人なら」など親密さではなく資質や能力で相手を選んだ場合。(4) なれない:「なれない」と回答した場合。(5) 無回答:「わからない」などの回答を含む。

Table 5は各回答の出現度数を年齢別，夢の性質別に示したものである。ひとつのセルあたりの度数が少ないため，「なれる―条件あり」の「親密」と「非親密」とを合わせて4カテゴリーにし，年齢差に関して3（年齢）×4（回答カテゴリー）のχ^2検定を行った。その結果，有意差が示された（$\chi^2(6) = 13.05$, $p<.05$）。残差分析の結果，4歳児は5歳児・6歳児よりも「なれる―条件なし」が多く，「なれる―条件あり」が少ないことが分かった。また，「なれる―条件あり」に関して，4，5歳児では全てが「親密」を挙げたのに対して，6歳児では「非親密」を挙げるものが多く見られた。次に，夢の性質による違いに関してもχ^2検定を行った。その結果，有意差は見られなかったが，空想的な夢の「なれる―条件あり」は5歳児において8名と多く見られ，現実的な夢の「なれる―条件なし」は6歳児において7名と多く見られた。以上から，夢を実現できる人物として，年少の幼児ほど「なれる―条件なし」というように，特に条件を設けていないが，年長の幼児ほど

「なれる―条件あり」というように，何らかの条件を設けていること，その条件も5歳児は同性や身近な友達というように親密な相手を挙げることが多いのに対して，6歳児では親密さよりも資質や能力を挙げることが多いことが示唆された。

総合考察

質問1の結果，幼児に「将来の夢」について尋ねた場合，空想的な夢をあげる割合は4歳から5歳にかけて多く見られるものの，6歳になるとその回答は急激に減り，逆に現実的な夢をあげる割合が増えることが分かった。この結果に対して，幼児はたまたま最初に空想的な夢を挙げたに過ぎないのではないかという可能性が考えられるが，質問5の回答結果はこの可能性を退けるものであった。最初に空想的な夢をあげた幼児は，第二の夢を求められた場合でもやはり空想的な夢をあげる傾向があった。また，空想的な夢を可能な夢と考えている者は6歳児において潜在的により多く存在するのではないかという可能性に関しては，質問6の結果，6歳児においてそのような者は少なく，4，5歳児と6歳児との違いをより際立たせる結果となった。これらの結果から，空想的な夢を可能な夢として考えているかどうかに関して4，5歳児と6歳児とでは違いがあり，この時期に空想と現実との間の境界を徐々に確立し，強固なものにしていくことが示唆された。

こうした結果は，本研究と同時に行った保護者への質問紙調査においても確認された。園児の保護者57名（4歳児17名，5歳児15名，6歳児25名；回収率66%）に「お子さんはいつも，大きくなったら何になりたいと言っていますか？　あるいは，何になりたいと思っている様子ですか？」と尋ねた結果，空想的な夢の割合は4歳児65%，5歳児40%，6歳児32%であり，加齢に伴い減少していることが分かった。また，「お子さんは普段の遊びの中でなりたいものと関連した遊びをしていますか？」と尋ねたところ，年齢差はなく全体の70%が「している」と回答した。また，「どのような遊びをしていますか？」，「そのような遊びに対して，ご家族は普段どのような言葉がけをしていますか？」と尋ねた結果，なりたい人物のまねをしてのごっこ遊びがほとんどであり，仮面ライダーやウルトラマンなどのヒーローものに関しては，ひどく叩いたり蹴ったりするなど危険な遊びをしている場合には注意をするといった回答が見られたほかは，「かっこいいね！」「上手だね！」などその行動をほめるような言葉がけをしているとの回答が得られた。これらの結果は本研究の結果を支持するものであり，幼児が日々の生活において「将来の夢」を思い描き，日常的にそれになりきって楽しんでいることを示唆している。

次に，夢実現の条件に関して考察すると，まず，「どうやったらなれると思う？」という質問に対して，4，5歳児では単に「大きくなれば」，「ご飯を食べれば」など成長を挙げる者が比較的多いのに対して，6歳児では練習すれば「練習すれば」，「いっぱい勉強すれば」など日々の努力を条件に挙げる者が多くみられた。これは目に見える外見的な変化にとらわれやすかった幼児が，年長になるにつれ経験の積み重ねによる内面の変化に注目するようになっていることを示唆している。

夢を実現できる人物については，より明確な年齢差が見られた。4歳児の多くは，夢は願いさえすれば誰でも実現させることができると単純に信じているようであるが，5歳児にもなると男あるいは女でないとダメとか，○○君（ちゃん）でないとダメなど，条件が加わるようになった。これは彼らが自らの性への意識や身近な友達への意識をより強め始めたことによるものと思われる。また，5歳児と6歳児とではその条件も少し異なっていた。「なれる―条件あり」とした5歳児10名は全て，同性や身近な友達など親密な相手を挙げたのに対して，6歳児ではそのような回答は11名中1名だけであり，その他はスポーツ選手であれば「身体の大きい人」，幼稚園の先生や看護婦さんであれば「たくさん勉強する人」というように，資質や努力に注目した回答をした。これらの結果から，4歳から6歳にかけて，幼児は夢実現の条件についての自らの考えを次第に洗練させていることが示唆された。

本研究では，幼児期における空想／現実の区別認識の発達過程について，空想と現実とを区別し，その境界を強固なものにしていく過程と，空想と現実との境界を飛び越えることを可能にする条件とは何かについての認識を洗練させていく過程という2つの観点から検討することを目的としていた。研究の結果，前者の過程についてはある程度の支持が得られたが，後者の過程については明確な支持が得られたとは言いがたい。この点については，6歳児にもなると空想的な夢をあげる子どもそのものがわずかであったため，年長の彼らが空想と現実との境界を飛び越える条件についてどのような考えを持っているのかを探ることができなかったことがあげられる。しかし，夢を実現できる人物についての分析から，「夢は誰でも実現できる」という認識が支配的である時期がまずあって，そこから次第に，「夢は誰でも実現できるというわけではなく，ある程度の

条件が存在する」という認識へと移行すること，そしてその条件も「自分に近い条件を備えた人なら」といった自己中心的なものから徐々に，その「目標達成に見合った資質を持つ，あるいはその努力を惜しまない人」というように，条件が変化することが示唆されたことは重要である。中でも5歳児が自己中心的な条件をあげた背景には，この時期彼らが自らの能力を過大に評価しすぎる傾向にあることが指摘できるのではなかろうか。

最後に，本研究では，「将来の夢」に関する調査者の質問に対して，幼児一人ひとりに回答してもらうという手続きをとったが，彼らが「将来の夢」を大人と同様の意味において捉えていたのかどうかについては，いくつか疑問が残された。第1に，幼児はそもそも真に「将来の私」というものを想定して回答していたのであろうか。「将来の私」というものを想定するためには，「私」が過去から現在，現在から未来へと連続して同一の存在であることを認識する必要があろうし，かつ時間の変化にともなって「私」は変化していく存在であることを認識する必要があるだろう。そのように変化しつつも連続しており同一である「私」を認識するうえで鍵となるものに，自己意識と自伝的記憶がある。都筑(1981)によると，幼児の自己意識は未分化な水準ではあるものの，4歳から6歳にかけて具体的・外面的な自己意識から抽象的・内面的な自己意識へと発達するという。また，木下 (2001) は，自分自身が体験し，かつある特定の過去になされたという認識を伴った，厳密な意味での自伝的記憶の発生は4歳頃であることを明らかにしている。このように幼児期において自己意識や自伝的記憶は成熟しつつあるが，その一方で「私」に対する哲学的な問いの発生は児童期中期にようやく見られ始めるとの報告（天谷，2002; 渡辺・小松, 1999）もある。従って「将来の私」のとらえ方は幼児と大人で質的に異なるということを十分考慮しておく必要があろう。

第2に，幼児は「将来の夢」を憧れや願望と同一視し，そうした対象を「将来の夢」に選んでいるに過ぎないのではないか，という可能性も考えられる。実際，幼児期において子どもは憧れや願望によって何らかのキャラクターの模倣をよく行う。それらは望ましい社会化において欠かせないものであるが (Hurlock, 1964)，「そうなりたい」とか「そうだったらいいな」という素朴な願いや憧れがそのまま「将来の夢」といえるかどうかと問われれば，それは否定せざるを得ないのではないか。実際，本研究の結果では，幼い子どもほどそうした素朴な願いや憧れが回答に反映されていたように思われる。本研究では4歳児の3名のみが唯一「将来の夢」として動植物の名前をあげた。彼らはイヌやネコ，さらにはバナナになりたいと回答した。また親を対象にした調査でも，動植物の名前をあげたのは4歳児の3名のみであった。同様の年齢による偏りは森 (1994a, b) の研究でも見られ，彼女はそれを種の永続性についての理解の未熟さによるものと説明しているが，それだけではなく，4歳の彼らが「将来の夢」を憧れや願望の延長線上で捉えていることの表れとも解釈できるように思われる。

第3に，幼児期は変身願望が強い時期であり，このことから将来なりたいものというよりはむしろ今すぐにでも変身してみたいものについて述べていたのではないか，という可能性も考えられる。小田 (1991) によると，現実の自分ではない別の存在になりたいという変身願望は，想像力を有する人間にとって本質的なものであり，幼児期においてすでに見られるという。またBettelheim (1976) やFraiberg (1959) によると，幼児期の初期，子どもは全能感の渦中にあり，自分は偉大な力を持つと信じているが，成長するに従って，自分がただの子どもであり，大人にはかなわないことに気づかされるようになる。幼児期中期になると子どもは変身への願望を強めるようになり，他方で失われつつある全能感を補うためにスーパーヒーロー・ヒロインへの憧れを強め，ごっこ遊びの中に盛んにそれへの模倣を取り入れるようになるという。こうした点を考慮すると，テレビのヒーローやヒロインになりたいとする彼らの空想的な夢は，将来を見据えてのものというよりも，この時期強まりを見せる変身願望の表れであると見ることもできよう。今後，これらの点について検討していくことが課題である。

引用文献

天谷祐子　2002　「私」への「なぜ」という問いについて：面接法による自我体験の報告から　*発達心理学研究*, **13**, 221-231.

Bettelheim, B. 1976 *The uses of enchantment: Meaning and importance of fairy tales*. New York: Raines & Raines.（波多野完治・乾侑美子訳　1978 *昔話の魔力*　東京：評論社）

第一生命保険相互会社　1994　大人になったらなりたいもの：未就学児及び小学生　*教育アンケート調査年間1994年版* (Pp.949-955)　創育社

DiLalla, L. F., & Watson, M. W. 1988 Differentiation of fantasy and reality: Preschooler's reactions to interruptions in their play. *Developmental Psychology*, **24**, 286-291.

Fraiberg, S. 1959 *The magic years*. New York: Scribner and Sons. （詫摩武俊・高辻礼子訳　1992　*小さな魔術師：幼児期の心の発達（新装版）*　金子書房）

Harris, P. L., Brown, E., Marriott, C., Whittall, S., & Harmer, S. 1991 Monsters, ghosts, and witches: Testing the limits of the fantasy-reality distinction in young children. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 105-123.

Hurlock, E. B. 1964 *Child development*. New York: McGraw Hill Book. （小林芳郎・相田貞夫・加賀秀夫訳　1972　*児童の発達心理学*　誠信書房）

Johnson, C., & Harris, P. L. 1994 Magic: special but not excluded. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 35-51.

Kavanaugh, R. D., Whittington, S., & Cerbone, M. J. 1983 Mothers' use of fantasy in speech to young children. *Journal of Child Language*, **10**, 45-55.

加用文男 1981 子どもの遊びにおける「現実」と「虚構」の認識的分化―理論と予備調査―　*東京大学教育学部紀要*, **20**, 343-351.

加用文男 1992 ごっこ遊びの矛盾に関する研究―心理状態主義へのアプローチ―　*心理科学*, **14**, 1-19.

木下孝司　2001　遅延提示された自己映像に関する幼児の理解：自己認知・時間的視点・「心の理論」の関連　*発達心理学研究*, **12**, 185-194.

森加代子　1994a　大人になったらなにになりたい？　*発達*, **10**, 40-46.　ミネルヴァ書房

森加代子　1994b　幼児にとっての「大人になる」という現実　*奈良女子大学大学院人間文化研究科年報*, **10**, 31-38.

Morison, P., & Gardner, H. 1978 Dragons and dinosaurs: The child's capacity to differentiate fantasy from reality. *Child Development*, **49**, 642-648.

大井晴策　1994　夢の出発点：幼児・母親・保育者を対象にした夢アンケート　*教育アンケート調査年鑑1994年版*（Pp.927-944）　創育社

小田晋　1991　ひとはなぜ変身したがるのか　*発達*, **46**, 75-77.　ミネルヴァ書房

Phelps, K. E., & Woolley, J. D. 1994 The form and function of young children's magical beliefs. *Developmental Psychology*, **30**, 385-394.

Prentice, N. M., Manosevitz, M., & Hubbs, L. 1978 Imaginary figures of early childhood: Santa clause, easter bunny and the tooth fairy. *American Journal of Orthopsychiatry*, **48**, 618-628.

Rosengren, K. S., & Hickling, A. K. 1994 Seeing is believing: Children's explorations of commonplace, magical, and extraordinary transformations. *Child Development*, **65**, 1605-1626.

Rosengren, K. S., Kalish, C. W., Hickling, A. K., & Gelman, S. A. 1994 Exploring the relation between preschool children's magical beliefs and causal thinking. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 69-82.

Samuels, A., & Taylor, M. 1994 Children's ability to distinguish fantasy events from real-life events. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 417-427.

Singer. D. G., & Singer, J. L. 1990 *The house of make-believe: Children's play and developing imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press. （高橋たまき・無藤隆・戸田須恵子・新谷和代訳 1997 *遊びがひらく想像力*　東京：新曜社）

Subbotsky, E. 1993 *Foundations of the mind: Children's understanding of reality*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Subbotsky, E. 1994 Early rationality and magical thinking in preschoolers: Space and time. *British Journal of Developmental Psychology*, **12**, 97-108.

杉村智子・原野明子・吉本史・北川宇子　1994　日常的な想像物に対する幼児の認識：サンタクロースは本当にいるのか？　*発達心理学研究*, **5**, 145-153.

Taylor, B., & Howell, R. J. 1973 The ability of three-, four- and five-year-old children to distinguish fantasy from reality. *Journal of Genetic Psychology*, **122**, 315-318.

富田昌平　2002　実在か非実在か：空想の存在に対する幼児・児童の認識　*発達心理学研究*, **13**, 121-134.

富田昌平・小坂圭子・古賀美幸・清水聡子　2003幼児による想像の現実性判断における状況の迫真性，実在性認識，感情喚起の影響　*発達心理学研究*, **14**, 124-135.

都筑学　1981　幼児の自己意識の発達　*教育心理学研究*, **29**, 70-74.

渡部尚美　2002　*子どもの「夢中世界」のヒミツ：ぼくたちがポケモンに熱中した理由*　雲母書房

渡辺恒夫・小松栄一　1999　自我体験：自己意識発達研究の新たなる地平　*発達心理学研究*, **10**, 11-22.

Woolley, J. D., Phelps, K. E., Davis, D. L., & Mandell, D. J. 1999 Where theories of mind meet magic: The development of children's beliefs about wishing. *Child Development*, **70**, 571-587.

付　記

1　本研究は，笹木順子・武田真澄・田中こずえ・千々松佑也の4名が「こども文化総合活動」(平成13年度)において実施し採集したデータに，著者が新たにデータを加え，再分析したものである。

2　調査にご協力いただいた幼稚園の先生方，園児のみなさんに心より感謝いたします。ありがとうございました。

Appendix 1　「将来の夢」の内容

年齢	性別	分類	人数	内容
年少	男児	空想的	2	ウルトラマン
(N=20)	(N=7)		各1	仮面ライダー，空ですべる人，お菓子を集めて食べる人，バナナ
		現実的	1	魚屋さん
	女児	空想的	2	セーラームーン
	(N=13)		各1	おジャ魔女どれみ，とっとこハム太郎，犬夜叉のかごめ，イヌ，ネコ
		現実的	各1	お花屋さん，看護婦さん，歯医者さん，パン屋さん，料理人，モーニング娘。
年中	男児	空想的	5	ガオレンジャー
(N=24)	(N=15)		3	仮面ライダー
			各1	ワンピースのルフィ，遊戯王，とっとこハム太郎，アンパンマン
		現実的	各1	救急士さん，ラーメン屋さん，ボクサー
	女児	空想的	各1	おジャ魔女どれみ，キティちゃん，ドラミちゃん
	(N=9)	現実的	2	ケーキ屋さん
			各1	看護婦さん，お花屋さん，お菓子屋さん，お母さん
年長	男児	空想的	3	ガオレンジャー
(N=24)	(N=10)	現実的	2	野球選手
			各1	工事屋さん，新幹線の運転手，パン屋さん，空手の先生，お父さん
	女児	空想的	3	おジャ魔女どれみ
	(N=14)	現実的	4	幼稚園の先生
			3	ケーキ屋さん
			各1	看護婦さん，花屋さん，本屋さん，美容師さん